

書評

広沢正孝 著

成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群

社会に生きる彼らの精神行動特性

阿部隆明

水先案内となる格好の 1 冊

1980 年代初頭に Wing によって提唱されたアスペルガー症候群という名称や、高機能広汎性発達障害、自閉症スペクトラム障害といった用語は、わが国でもこの 10 年で瞬く間に人口に膾炙するようになった。当初は児童精神医学の領域で起きた現象は、当事者たちの手記の相次ぐ公開をも促し、通常の生活を送っている成人にも定型発達とは異なる認知・行動パターンがあるという理解は進んだように見える。とはいえ、高機能広汎性発達障害といわれても、実際にこれを診察したことのない、あるいはこれに気づかなかった一般の精神科医にはイメージがわからない面があった。

なるほど最近では、特にアスペルガー症候群を中心とした高機能広汎性発達障害に関して、精神医学の雑誌で次々に特集が組まれてはいる。しかしながら、いずれも啓発的な解説や症例報告が中心であり、しかも児童精神医学の立場からのものも多く、成人を対象とする一般精神科医の心にはいまひとつ響いていない感があった。発達障害も高機能になればなるほど、また成人になればなるほど、その特性が見えづらくなるためである。こうした事情を踏まえると、本書は統合失調症をはじめとした成人の精神病理に精通した著者が成人の高機能広汎性発達障害を論じている点で特筆に値する。

その内容は 5 部からなる。第 I 部では広汎性発達障害の簡単な解説と問題提起がなされて

いて、執筆の意図が明確になる。第 II 部では詳しい症例記述から論を起し、発達障害者の世界や自己像を説明している。たとえば、彼らはタッチパネル様の自己イメージを持ち、そのつどタッチパネルを開いたときに展開するウィンドウの中で対象側と一体化するという。こうした患者の体験に即した PDD 的自己の存在様式に関する説明は非常にわかりやすい。症例は著者の臨床経験に基づいて創作されたということだが、いずれも臨場感にあふれた記載で、患者の息遣いが見事に伝わってくる。第 III 部では彼らの精神行動特性が具体的に例示されていて、その人物像が把握しやすい。第 IV 部では、さらに症例を追加したうえで、発達障害の精神病理を論じながら、他の精神障害との合併や異同についても詳述している。第 V 部では、この障害をめぐる今後の課題が手際よくまとめられている。

このように、本書は成人の高機能広汎性発達障害について抱かれる一般精神科医や臨床心理士の関心を網羅しているといっても過言ではない。主要文献も過不足なく挙げられており、成人の同障害を理解したい精神科関係者にとって、水先案内となる格好の 1 冊である。

(自治医科大学精神医学/自治医大とちぎ子ども医療センター)

●B5 192 頁 2010 定価 3,570 円(本体 3,400 円+税) 医学書院